

江吏部集試注（一）

木戸，裕子
鹿児島県立短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10357>

出版情報：文献探究. 36, pp.1-15, 1998-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

江吏部集試注 (一)

木戸 裕子

凡例

- 一、底本は群書類従本を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。
一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。
一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

- 内閣文庫(旧浅草文庫)本―(内)
山口県立図書館本―(山)
陽明文庫本―(陽)
祐徳稲荷本―(祐)
静嘉堂文庫本―(静)
神宮文庫本―(神)
国会図書館本―(国)
無窮会図書館本―(無)
東大図書館(E45 656)本―(東A)
東大図書館(旧南葵文庫)本―(東B)
岡山大学図書館本―(岡)
島原松平文庫本―(島)
東北大学図書館本―(東北)
京大図書館本―(京)
多和文庫本―(多)
賀茂別雷文庫本―(賀)
名古屋市立鶴舞中央図書館本―(鶴)
本朝文粹(新日本古典文学大系)―(粹)
本朝麗藻(校本本朝麗藻)―(麗)
一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。
煙・烟 花・華 叢・藂 窓・櫺など。

- 一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。
一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考に示した。

付記

『江吏部集』の作者大江匡衡の伝記は、大曾根章介氏「大江匡衡―儒者の生涯―」『漢文学研究』第十号に詳述されている。また、最近の論文としては、今浜通隆氏「『本朝麗藻』全注釈(28)―作品(上の11)の作者・大江匡衡について其―」『並木の里』三十四号から「『本朝麗藻』全注釈(37)―作品(上の11)の作者・大江匡衡について其―」『並木の里』四十号まで、『江吏部集』巻中の「述懐古調詩」を注釈する形で、匡衡の伝記を載せる。他に、後藤昭雄氏「大江匡衡―卿相を夢見た人―」『平安朝文人志』吉川弘文館 平成五年、今浜通隆氏「大江匡衡―述懐古調詩―の執筆時期とその意図について」(上)(下)『武蔵野国文学』第四号・第六号)も匡衡伝に関わるものである。

大江匡衡の詩文については前述の今浜氏の論文の他、後藤昭雄氏「大江匡衡の詩文」『平安朝漢文学論考』桜楓社 昭和五六年、拙稿「大江匡衡 栗田障 子十五連作」『文献探究』第二十七号・第二十九号)がある。

語釈、通釈に当たっては、近年立て続けに公刊された、平安朝漢文学諸作品の索引類、注釈書類に多大な学恩を被った。これらの著作がなければ、本試注を発表するのはまだずつと先のことになったであろう。

また、特に『江吏部集』上・中巻の注釈については、昭和五十八年度後期の金原理先生による国文学演習、および、演習終了後の昭和五十九年から数年にわたって先生のご指導のもとに行われた「『江吏部集』読書会」での議論から得たものが大きい。金原先生をはじめ、当時の読書会のメンバー(辛島正雄・後藤康文・坂本信道・安藤吉和諸氏)に深く感謝申し上げる。

一 月下即事（于時八月十四日）

風爽雲收遊月下
誰知明日勝今宵
若無惟月恩光至
筆路詩場定寂寥

風爽やかに雲收まり月下に遊ぶ
誰か知らむ明日の今宵に勝るを
もし惟れ月の恩光の至る無くは
筆路詩場定めて寂寥ならむ

【校異】

1、明日―明月（神） 2、月―日（東A）（島）（京）（賀）（山）（祐）（岡）（鶴）

【平仄】（◎は韻字）

○×○○○×× ○○○××○○◎ （下平声宵韻）
×○○×○○× ××○○××◎ （下平声蕭韻） 同用

【語釈】

◎雲收―雲が晴れる。「島樹間林巒 雲收殘雨氣」〔白氏文集〕三一七一「奉酬侍中夏中雨後遊城南庄見示八韻」

◎誰知明日勝今宵―長保三年八月十五日の月食の前夜長保三年八月十四日夜を指すか。

八月十五日の月食は亥の初から丑二までのほぼ五時間に亘るものであった（本朝統曆による）。ただし、長保三年は匡衡尾張守拜任の年。

◎恩光―恵みの光。多くは万物をはぐくむ春の日の光をいうが、ここでは月の光によつて詩心が喚起されることをいう。また、天子の恵みを日月の光にたとえる。

「方今堯日高照 刷傷翅於恩光之中」〔本朝文粹〕卷六「請殊蒙天恩因准先例兼任式部大輔闕状」源為憲

◎筆路―学路・文路に同じ。文学の道。「徒瘦学路之險難」〔江吏部集〕卷上「五月五日陪内相府池亭同賦雲峯入夏池応教」

◎詩場―詩作の場、詩会・詩宴などの場。文場に同じ。「詞人才子 漸吞吟詠之声 詩境文場 已為寂寞之地」〔本朝文粹〕卷二「停九日宴十月行詔」大江朝綱

【通釈】

月の光のもとの即興の詩（時に八月十四日のことである。）
風が爽やかに吹き、雲も晴れたので月下に宴を開く。
いったい誰が明日の方が今宵に勝っているなどとわかるのだろうか。今宵の月の方が明日の十五夜よりもずつとすばらしいかもしれないではないか。
もしこの詩心を喚起するありがたい月の光が届くことがなければ
詩作の場はきつと寂しいものとなるよ。（だから月の光がさやかな今宵の内に詩を作るのである。）

【別解】

もし文人たちに天子の恵の光が届かないとすれば
詩会を催しても定めて寂しいものとなるであろう。（だから、文人には特別の恩顧を願うのである。）

二 八月十五夜江州野亭对月言志

去年八月十五夜
宮吏務以在尾州
今年八月十五夜
事湯葉以在江州
不見漢宮之月
不見梁園之月
不聞鳳琴之声
不聞龍笛之声
我雖假風月之名
於風月之席因緣猶淺明矣
是風骨之鯁之令然也
是月將之驚之令然也
定知
翰林主人独歩於文場

去年の八月十五夜
吏務を営みて以て尾州に在り
今年の八月十五夜
湯葉を事として以て江州に在り
漢宮の月を見ず
梁園の月を見ず
鳳琴の声を聞かず
龍笛の声を聞かず
我風月の名を仮ると雖も
風月の席に因縁猶ほ浅きこと明らかなり
是れ風骨の鯁きこと然らしむればなり
是れ月將の驚きこと然らしむればなり
定めて知りぬ
翰林主人文場に独歩し

醉郷先生鷹揚於酒城
於此
性備病侵官冷齡仄
姓江翁望江樓亦有使
員外郎遊外土亦無妨
賈持者祖父養生方三卷坐臥卷舒
相隨者愚息起居郎一人辰昏左右
纏宿霧而獨居遙隔青雲之路
向明月而閑詠自為白雪之歌
嗟乎
才智不玄々
鬢髮為白々

醉郷先生酒城に鷹揚すらむことを
是に
性備くして病侵し、官冷じうして齡仄きぬ
姓は江の翁なれば江樓を望むに亦便有り
員外の郎なれば外土に遊ぶも亦妨げ無し
賈持する者は祖父養生方三卷。坐臥に卷き舒ぶ
相隨ふ者は愚息起居郎一人。辰昏に左右く
宿霧に纏はれて独り居れば遙かに青雲の路を隔つ
明月に向ひて閑かに詠ずれば自から白雪の歌
為り
ああ、
才智玄々たらず
鬢髮白々たり

身無余潤不恥子貢之問病
志在閑居欲學陶潛之帰田
聊題詠月之篇句
暫慰凌風之心情云爾

賓客來たらず僮僕去りぬ
獨り山月を看れば秋に堪へず
村童邑老我を軽んずることなかれ
天祿の帝師此の州を宰めたり

1, 八月十五夜江州野亭一仲秋三五夕於江州野亭(粹) 2, 鯉一鯨(底本) 他本ニ
ヨツテ改ム 2, 鷺一駕(京)(賀) (祐)(神)(鶴) 一駕(朱筆ニテ「鷺」ト傍
書)(山)(岡) 3, 城一城(内)(陽)(國)(東A)(東B)(島)(京)(賀)(山)
(祐)(神)(無)(岡)(東北)(多)(鶴)(粹) 一城(二城)ト傍書(静)
4, 性一情(粹) 一情粹(朱筆ニテ傍書)(賀) 5, 仄一反(陽)(東A)(賀)
(岡) 一反(朱筆ニテ「仄」ト傍書)(鶴) 一広(多) 6, 乎才智不玄々 鬢

【校異】
1, 八月十五夜江州野亭一仲秋三五夕於江州野亭(粹) 2, 鯉一鯨(底本) 他本ニ
ヨツテ改ム 2, 鷺一駕(京)(賀) (祐)(神)(鶴) 一駕(朱筆ニテ「鷺」ト傍
書)(山)(岡) 3, 城一城(内)(陽)(國)(東A)(東B)(島)(京)(賀)(山)
(祐)(神)(無)(岡)(東北)(多)(鶴)(粹) 一城(二城)ト傍書(静)
4, 性一情(粹) 一情粹(朱筆ニテ傍書)(賀) 5, 仄一反(陽)(東A)(賀)
(岡) 一反(朱筆ニテ「仄」ト傍書)(鶴) 一広(多) 6, 乎才智不玄々 鬢

【語釈】
◎去年八月十五夜 寛弘元年八月十五夜。匡衡の尾張守拜任は、正暦三年、長保三年、
寛弘六年の三度だが、このうち一度目の正暦三年は遙任だったらしく、三度目の寛
弘六年は十月の着任から一年足らずの翌七年三月三十日に丹波守に遷っている。
↓真鍋熙子「赤染衛門の周辺―平兼盛と大江匡衡―」(『文学・語学』九号)、大曾
根章介「大江匡衡―一儒者の生涯―」(『漢文学研究』十号)、今浜道隆「大江匡衡
「述懐古調詩」の執筆時期とその意図について(上)―平安朝漢文学の注釈的研究
―」(『武蔵野国文学』四号)
◎尾州 尾張國
◎江州 近江國
◎湯藥 湯治と服藥。病氣の療治。「当以疾病為論、安得不用湯藥針艾救之哉」(『顔子
家訓』教子)
◎漢宮 漢の宮殿。平安朝漢詩文では本朝の宮中の意で使われる。「漢宮入内之夜 傍
華輦而成歎 荒原送終之時 混松風而添哭」(『本朝文粹』卷十四「為左大臣息女
女御修四十九日願文」大江朝綱)
◎梁園 漢代、梁孝王が営んだ庭園。ここでは漢宮と同じく宮中の意で用いられている。
「自彼緘山之秋月 玉笙之音永吞 梁園之春風 瓊花之色空落」(『本朝文粹』卷
十一「七言暮春施無畏寺眺望」大江以言)
◎鳳琴 琴の美称。鳳と琴との関わりは、嵇康「琴賦」の「乃斲孫枝 准量所任 至人據
思制為雅琴 錯以犀象 藉以翠綠 弦以園客之糸 徹以鍾山之玉 爰有龍鳳之象 一中
略一遠而聽之 若鸞鳳和鳴戲雲中 追而察之 若衆葩敷榮耀春風一後略」などがあ

髮為白々一呼 心事日々衰 鬢髮星々薄(粹) 一呼 心事日々衰 鬢髮星々薄(朱筆
ニテ傍書)(山)(鶴) 一呼 心事日々衰 鬢髮星々薄粹(朱筆ニテ傍書)(賀)
7, 凌風一緩風(粹) 一緩粹(朱筆ニテ傍書)(賀) 一凌風(内)(島)(多)
8, 情一清(陽) 一清(情)ト傍書(祐)(鶴) 9, 老一者(鶴)

【押韻】
○×ハ○○×× ×○○×以○○
○○××××× ○××○○×○(下平声尤韻)

る。

◎龍笛＝笛の一種。

◎風月之名＝詩作をするという名、詩人であるということ。↓後藤昭雄「古今集時代の詩と歌」(『国語と国文学』六十卷五号)、大曾根章介「『風月』攷」(『漢文学会々報』三六)、滝川幸司「『風月』考―公宴詩会との関わりにおいて―」(『語文』六六輯)

◎風骨＝文章の骨格、『文心彫龍』の篇名。「詩総六義、風冠其首。斯乃化感之本源、志氣之符契也。是以招悵述情、必始乎風。沈吟鋪辭、莫先於骨、如体之樹骸、情之含風、猶形之包氣。」(『文心彫龍』風骨)「先師獨擢予詩曰、綴韻之間甚得風骨。」(『本朝文粹』卷八 紀長谷雄「延喜以後詩序」)

◎鯉＝アラシ(観智院本『類聚名義抄』)

◎月将＝月々に進歩する。将は進むの意。「維予小子不聰敬止、日就月将、学有緝熙于光明」(『詩経』周頌「敬之」)

◎驚＝鈍い馬、のろい馬。オソシ(観智院本『類聚名義抄』)

◎翰林主人＝文章博士の唐名。寛弘元年時点での文章博士は大江以言。(長保三年八月から、『中曆』による)

◎醉郷先生＝酔郷に遊ぶ人。白居易や皮日休の号、醉吟先生に倣った命名か。

◎酒城＝地名。唐代の詩人皮日休に、「酒城詩」がある。ここでは、酒を飲んだときの別天地に遊ぶような境地をいう。

◎独歩・鷹揚＝独歩は一人抜きでさまた。鷹揚はゆったりと我が物顔に振る舞うさま。「今世作者可略而言。昔仲宣独歩於漢南、孔璋鷹揚於河朔。」(徐注本『蒙求』三三三―仲宣独歩)

◎性慵＝慵はモノウシ(観智院本『類聚名義抄』)。慵・懶は白詩に頻出する語。「性慵無病常称病 心足雖貧不道貧」(『白氏文集』二八二九「酬皇甫賓客」)「独出雖慵懶 相逢定喜權」(『白氏文集』三三三―五「晚春酒醒尋夢得」)

◎姓江翁＝匡衡の姓、大江の江と江州(近江国)の樓、或いは琵琶湖のほとりの樓との語呂合わせの表現。自分の姓の全部または一部を利用した掛詞的な修辭は匡衡以前の日本漢詩文においてもままた見られる。↓工藤重矩「平安朝漢詩文における縁語掛詞の表現」、『和漢比較文学叢書3 中古文学と漢文学1』(汲古書院) 拙稿「『江吏部集』に見られる言語遊技の表現について」、『語文研究』第六四号

◎員外郎＝式部権大輔の唐名。大江匡衡の式部権大輔任官は長徳四年。

◎資持＝賜つて所持する。

◎祖父養生方＝匡衡の祖父維時の著作か。未詳。

◎愚息起居郎＝匡衡の息、挙周。起居郎は内記の唐名。

◎左右＝助ける。「以左右民」(『易経』泰)

◎宿霧＝病のこと。宿病に同じ。「青雲之路」との縁でいう。「猗乎公氏德行 無慙古賢 漢家之旧風相伝 薄浜之宿霧將散」(『本朝文粹』卷紀齊名「答入道前太政大臣辞大臣并章奏等表勅」)「赤塚陸男「病気の比喩「霧」についてのノート―本朝文粹等の用例―」(『筑紫女学園短期大学紀要』第二八号)「霧を病の比喩に使う和文脈での例については、同「雅語「霧」―病気の比喩として―」(『国語国文学研究』第二八号)

◎青雲之路＝高位高官に上る道のり。「始覚青雲応易踏 天恩已許騎龍媒」(『田氏家集』一六四「感喜勅賜白馬因上呈緒侍中」)

◎白雪之歌＝楚の国の歌曲。高尚で唱和しがたい曲とされた。ここは、「明月」の縁で白雪といい、他に和する人もなく孤独に詩を詠ずる様子をいう。

◎余酒＝辞書類に検索しえないが、余財に同じか。「抑二百人袖工等、并各段別二斗見米テ、以残一斗之余潤於依估テ修理之御材木ヲ所取進也」(『平安遺文』二六六六 久安五年六月十三日「伊賀国目代中原利宗・東大寺僧覚仁問注記」)

◎子貢之問病＝『莊子』讓王篇に見える故事。貧しい暮らしをしていた原憲を訪ねた子貢が、その貧なることを「ああ、先生何ぞ病める」と慨嘆したのに対し、原憲は「貧であることは病ではない」と答えた。「原憲居魯。環堵之室、茨以生草。蓬戸不完、桑以為柅、而甕牖二室、褐以為塞。上漏下濕。匡坐而弦。子貢乘大馬、中紺而表素。軒車不容巷。往見原憲。原憲華冠緋、杖藜而応門。子貢曰、嘻、先生何病。原憲応之曰、憲聞之、無財謂之貧、学而不能行謂之病。今憲貧也、非病也。子貢逡巡而有愧色」(『莊子』讓王)

◎閑居＝心静かに暮らすこと。「嘗登高遠望歎息言曰、大丈夫居世、生当封侯、死当廟食。如其不然、閑居可以養志」(『後漢書』梁統伝(子棟伝))

◎陶潜之帰田＝陶潜の「帰去來辞」を踏まえ、官を捨て隠遁することをいう。

◎凌風之心情＝鶴が己の巢がくずれようとするときに風を押し切つて飛び立つように、現状を打破したいという気持ち。ここでは故郷、すなわち都に帰りたいという気持ち

ちをいうか。「朋情以鬱陶 春物方駘蕩 安得凌風翰 聊忭山泉賞」(『文選』卷三十一「直中書省」謝玄暉)「亮無農風翼 焉能凌風飛」(『文選』卷二十九「古詩十九首」其十六)

◎云爾 詩序の末尾の語。それまでの文章を受けて、「このような次第である」と結び。『二中歴』卷十二「書詩歷」に、「西曹司讀作法、并タリ序、云爾。東曹司讀云、并セテ序、云フコト爾リ」とあるのに従い、本試注では東曹(大江家)の読み方である「云ふこと爾り」と読んでおく。

◎僮僕 〓しもべ、召使い。「家貧自忘農商謀 臨老居官官俸薄 一兩僮僕不肯留」(『本朝文粹』卷一「無尾牛歌」源順)

◎村童 〓老村の子供や老人。「村童店女仰頭笑 今日使君真是愚」(『白氏文集』二五二四「過敷水」)「生衣欲待家人著 宿釀當招邑老酣」(『菅家文草』卷四「四年三月廿六日作」)『和漢朗詠集』夏部更衣にも出)

◎天祿帝師 〓円融天皇の侍読学士であった大江齊光。齊光の侍読学士は康保三年(『二中歴』による)。齊光は天延元年に近江守に任ぜられた(『公卿補任』による)。

◎宰 〓ツカサドル ヲサム(観智院本『類聚名義抄』)

【通釈】

八月十五夜、近江国の野亭で月に向かって志を述べる

去年の八月十五夜には国司として尾張の国にいたが、今年の八月十五夜は病気の療治のために近江国にいる。(したがって、せつかくの仲秋の名月というのに)宮中の月を見ることができない。観月の宴での管弦の音色を聞くこともできない。(宮中の宴に列することができないのは)私が風月の名を仮けている(詩作を事としている)といっても、風月の席(詩会の席)にまだ縁が浅いからなのだ。それというのも私の文章の骨格が粗雑なせいであり、私の学問の進歩が甚だのろいせいなのである。きつと今頃宮中では、文章博士が詩宴の席で独りぬきんでた詩を作っているであろうし、酒を愛する連中は酒に酔ってのびのびした気分を楽しんでいるであろう。私はといえば、生来の怠け者でしかも病に冒され、官位は低いままですつかり年をとってしまった。大江という姓の老人なのだから、都を離れ琵琶湖のそばの江楼で月を望むにも都合がよい。職は正規の官ではない員外郎(式部権大輔)なのだから、都

の外の近江国に滞在していても何の差し障りもない。祖父維時の著した養生方三巻を大切に所持し、常に拵けて読んでいる。息子で内記の挙周が付き添っており、朝に夕に何かと手助けしてくれる。しかし、病に苦しみ独り近江国にいるので、栄達の道からは遙かに遠ざかってしまった。明月に向かって静かに詩を詠いても、共に和してくれる者もない。

ああ、才能はまったく深まらないままなのに、髪はすつかり白くなってしまった。身に余る財産などないが、あの子貢が「ああ先生何ぞ病める」と問うた原憲のような貧しい暮らしぶりを恥じたりはしない。私の志は世を退いて心静かに暮らすことにあるので、「帰去來辞」を作り田園に帰った陶潜を見習おうと思う。ここにいささか月を愛でる詩を作り、しばらく望郷の心情を慰めようというわけである。

八月十五夜というのに訪れる客もなく、召使いも帰ってしまった。独り山から昇る月を見ていると、秋の愁いを堪え難く感じる。村の子供や老人たちよ、病に悩む私を軽んじないでほしい。円融天皇の侍読をつとめた我が叔父大江齊光はこの近江国を治めていたのだから。

三 暮秋左相府東三条第守庚申同賦池水浮明月詩〔以澄為韻〕

詩情縁底太蒸仍	詩情縁底、ただ蒸仍なる
蓮府秋池浮月燈	蓮府の秋池月燈を浮かぶ
碧浪金波応合体	碧浪金波、まさに体を合すべく
緑蘋紅桂是親朋	緑蘋紅桂、是れ親朋たり
洲晴舞鶴疑廻雪	洲は晴れ舞鶴は雪を廻らすかと疑ひ
底徹遊魚似上氷	底徹りて遊魚は氷に上に似たり
多歳追従文墨客	多歳追従す文墨の客
明時愧独事無能	明時に独り無能を事とするを愧づ
(一本、多歳追従文墨事	向明自愧独無能)

〔二本、多歳追従す文墨の事 明に向かひて自から独り無能なることを愧つ〕

【校異】

- 1, 太一(底) 他本ニ依ッテ改ム
- 2, 蒸一蒸(底) 他本ニ依ッテ改ム
- 3, 朋一明(鳥)(山)
- 4, 多歳追従文墨客 明時愧独事無能一多歳追従文墨事 向明自愧独無能(底本以外) 異文ト見テ、シバラク底本ノママニシテオク。

【押韻】

○○○○○○○○(下平声登韻)
 ○○○○○○○○○(下平声登韻)
 ×○○○○○○× (下平声登韻)
 ×○○○○○○○ (下平声蒸韻)
 ○○○○○○○× (下平声蒸韻) 同用
 ○○○○○○○× (下平声登韻)
 ○○○○○○○○ (下平声登韻)
 (二本、○○○○○○○○×○○○○○○○○(第八句二字目が孤平となる))

【語釈】

- ◎暮秋左相府東三条第庚申寛弘二年九月十五日道長邸庚申。一九月十五日庚申、從朝天晴、參内、即退出。上達部七八人許、殿上人会合、守庚申、有作文事、題池水浮明月、韻澄。十六日辛酉、午時許講作文」(『御堂關白記』寛弘二年)
- ◎庚申道教から来た風習の一つ。庚申の日は眠っている人の体内から三尸虫が出て、天帝にその人の罪惡を告げて寿命を縮めると考えられていた。それを免れるために、庚申の夜は一晚眠らずに夜を明かし、詩歌管弦などの遊びで眠気を防いだ。
- ↓窪徳忠『庚申信仰の研究』上・下(原書房)。平安朝においても守庚申詩會は多く行われ、現存の作品も多い。『平安朝逸名詩序集拔萃』及び『含英私集拔萃』には「庚申」の部立がある。

- ◎縁底なぜ、どういうわけで。「何況諸儒之間、縁底厩匡衡之言」(『本朝文粹』卷七一「請特蒙天裁召問諸儒決是非今月十七日文章生試判違例不穩雜事狀」大江匡衡) ↓後藤昭雄「平安朝詩文の俗語」『語文』四八(昭和六二年)
- ◎太一ハナハダシ(觀智院本『類聚名義抄』)「太一」(静嘉堂本『江吏部集』)
- ◎蒸仍蒸蒸、蒸蒸におなじ。物の盛んに起こるさま。「蒸蒸・遂遂、作也」(注)「皆物盛興作之貌。」(『釈文』) 諸仍之反、本今作丞丞」(『爾雅』「積訓」)「丞丞、猶仍也」(『後漢書』吳祐伝論「注」)ただし、仍仍は必ずずするさま。

◎蓮府大臣の邸。転じて大臣自身をいう。南斉の王儉が蓮を愛し、邸に蓮の池を作ったという故事に基づく。「蕭緬与儉書曰、盛府元僚、実難其選、賔景行泛緑水依芙蓉、何其麗也。時人以儉府為蓮花池、故緬書美之」(『南史』) 東泉之伝、「方今蓮府之中、排一書閣、閣東有碧瑠璃之水」(『本朝文粹』卷十一「冬日左相府少侯書閣同賦落葉波上舟」慶滋保胤)

◎金波月の光。「金波麗鵲鵲 玉繩低建章(李善云、漢書歌云、月穆々以金波)」(『文選』) 卷二六「暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚」謝朓「潤金波之遠流 弘玉葉而幽茂」(『本朝文粹』) 卷八「八月十五夜陪普師匠望月亭同賦桂生三五夕」紀長谷雄

◎合体一体となること。「昔与卿同胞而生育 今与卿合体而行藏」(『本朝文粹』卷十二「詰眼文」) 三善清行

◎緑蘋緑の水草「晓浪一声 元礼移棹於緑蘋之月」(『本朝文粹』卷三「陳德行対策」紀育名)

◎紅桂諸橋大漢和辞典によれば紅桂は櫛(シキミ)のことをいうとあるが、ここでは月に生える桂の木が紅葉していることをいう。「ひさかたの月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらむ」(『古今集』) 秋歌上一九四 壬生忠岑「月ノ桂ト八月天子ノ宮殿ノ、其庭ニ桂アリ。秋ハ此カツラ紅葉シテ赤クナル故ニ、月ノ光ハマサルト云ヘリ。其ノ心ヲ百詠ニ、桂生三五夕ト書リ。意ハ月ノ桂ノ紅葉スルヲ云也」(『弘安十年古今集歌注』) 月の中に生える伝説の桂の木が秋になれば紅葉して、月の光をいっそう明るくすると考えられた。『本朝無題詩』卷三の中原広俊「月下即事」詩の「紅桂為誰尤有意」の「紅桂」も紅葉して輝きを増した月の桂をさす。

ちなみに中国においては桂とは木犀の類の木をいい、紅葉せず、花が咲くことによつて輝きを増す。「天漢看珠蚌 星橋視桂花」(『初学記』) 月「舟中望月詩」庾信

◎廻雪雪が舞い巡るように舞うさま。「飄飄兮若流風之廻雪」(『文選』) 卷一九「洛神賦」「落花不閑渡水自舞 遮沙風而婉轉 廻雪之袖暗翻」(『江吏部集』) 卷下「暮春侍宴左丞相東三条第同賦渡水落花舞衣製詩序」ここは、月の光に照らされて羽ばたく鶴の羽が雪のように白く輝くさま。

◎上氷魚が氷の上に上る。「孟春之月 中略 東風解凍、蟄虫始振、魚上氷」(『礼記』) 月令「ここは、月の光を映した水中を魚が泳ぐ様子が、氷の上にいるように見えるさま。

◎追従_レつき従う。「其得追従_レ於此筵者、珥_レ之貴臣、含_レ鷄之狎客也」(『本朝文粹』卷九「早春侍内宴賦聖化万年春応製」大江朝綱)

◎文墨客_二文人たち。墨客に同じ。「宴集華城_二文墨客_一」(『本朝無題詩』卷九「閏三月月日慈恩寺即事」藤原明衡)

◎明時_二立派な君主のもとでよく治まった世。「既非器用 自漏_レ時之祿」(『本朝文粹』卷六「請被特蒙天恩兼任民部大輔闕状」橘直幹)

◎向明_二向明月に同じ。明月に向かつて。「向明月而閑詠自為白雪之歌」(『江吏部集』卷上「八月十五夜江州野亭对月言志」)

【参考】

『逸文詩序集拔萃』に菅原宣義による詩序の断片あり。(後藤昭雄氏の_レ教示による)

「於是属庚申之良夜 微才子之群英 是誠縁化之余力 命筆硯而相娛者也」(『池水浮明月』宣義)

『和漢兼作集』に藤原伊周の一聯あり。「立汀宿鶴応衝玉 在藻潜魚似負水」(卷七秋部中「池水浮明月」儀同三司)

【通釈】

暮秋、左大臣の東三条第で庚申を守り、皆で「池の水に明月を浮かべる」という題で詩を作る。「澄」という字を韻とする

詩情は何が原因でこのようにさかんにわき起こるのか。

それは左大臣道長公の邸の池が暮秋の明月を浮かべているから。

池水の碧の波と月光の黄金の波はまさに一体となっており

紅葉した月の桂は池に映り、水中の緑の藻と親しい友のように調和している。

池の中洲に羽ばたく鶴は晴れた空の月の光を浴びて、あたかも雪を舞い巡らせているかのようだし

池の底までとどく月の光の中で、水中の魚は水の上にいるように見える。

さて私はいえ、長年文人たちに付き従ってきたが

このすばらしい治世に、ただ独り無能であることを恥じているのである。

【一本】

さて私はいえ、長年詩作の業に従事してきたが
明月に向かつてただ独り無能であることを恥じているのである。

四

七言 歳暮於藤少侯書斎守庚申同賦明月照積雪各分一字成教一首〔探得庭字 井序〕

夫去三戸学九転者彼大聖之玄風也
賞花下_レ燕月前者我少侯之素意也

是故
借景物於流年
命鶴詠於良夜
鳳閣鸞台之客刷羽翮以影從

打鉢刻燭之家蓋聲華以響応
彼伯禽之居周也
纔得過_レ商子而問_レ礼
霍禹之在漢也

未知守庚申而言詩
今之掩古不教而成者也
于時
積雪凝色月照添光
蒼々兮易迷_レ
疑鬢齊_レ紉於楚練之冷
皎々兮難弁
誤对鸞鏡於鶴髮之寒
至夫

雪時乘月以遠往
月夜遇_レ雪以閑遊
輕棹容与王子猷之舟移影
繫絃咽流阮嗣宗之琴照声者也

それ三戸を去り九転を学ぶは彼の大聖の玄風なり
花下を賞_レで月前に燕するは我が少侯の素意なり
是の故に
景物を流年に惜しむ
鶴詠を良夜に命じたまふ
鳳閣鸞台の客羽翮を刷_レひて以て影のごとく從

ひ
打鉢刻燭の家声華を蓋へて以て響のごとく応ぜり
彼の伯禽の周に居るや
纔に商子に過ぎりて礼を問ふを得るのみ
霍禹の漢に在るや
未だ庚申を守りて詩を言ふを知らざるなり
今の古を掩_レふや教へずして成るものなり
時に
積雪色を凝らし月照光を添ふ
蒼々として迷ひ易し
齊_レ紉に楚練の冷やかなるを襲ねたるかと疑ひ
皎々として弁じ難し
鸞鏡に鶴髮の寒きを対_レはしめたるかと誤る
それ

雪時月に乗じて遠く往き
月夜雪に遇ひて以て閑かに遊ぶに至りては
軽き棹は容与として王子猷の舟影を移し
繋げる絃は流れに咽ひ阮嗣宗の琴声を照らす者也

既而

坐客興久梁鷄唱頻

醉後入鄉追笑右軍之會

詞皆遇境快飛左賢之文

匡衡

腐木之蚩經歲適扇累葉於儒風

愚谷之鶯待春唯望欵華於惠露云爾

既にして

坐客の興久しく梁の鷄唱ふこと頻りなり

酔ひて後に郷に入る、追ひて右軍の會を笑ひ

詞は皆境に遇ふ、快く左賢の文を飛ばせり

匡衡

腐木の蚩なれど歳を経て適に累葉を儒風に扇ぎ

愚谷の鶯なれば春を待ちて唯欵華を惠露に望むのみと云ふこと爾り

(序ノミデ詩ナシ)

【校異】

- 1, 過一ナシ(底) 他本ニ依ツテ補ウ
- 2, 問一同(京) (祐) 一問(東北)
- 3, 商一高(国) (島) (京) (多)
- 4, 皎々兮難弁 誤對鸞鏡於鶴髮之寒一ナシ(京) (賀) (山) (祐) (神) (岡) (東北) (鶴) (多)
- 5, 遇一過(京) (賀) (山) (祐) (神) (岡) (東北) (鶴) (多)
- 6, 容一客(内) (祐) (鶴) (多) 一客(ミセケチシテ「容」ト訂正) (静) 7, 遇一過(京) (賀) (山) (祐) (神) (岡) (東北) (鶴) (多)
- 8, 累一黒(静) (国) (島) (多) 一黒(累平)ト傍書(陽) (東B) (賀) (山) (祐) (東北)

【語釈】

◎藤少侯 藤原頼通。「少侯」は辞書類に見出し語を検出し得ないが、若君の意か。

◎三戸 三戸虫。道教にいう、人の体内に住むという三つの虫。庚申の夜、寝ている人の体内から出て、天帝にその人の罪を密告するという。『口遊』や『二中曆』に見える庚申の夜の誦文によれば、三戸の名は彭侯子、彭常子、命兒子。「彭侯子、彭常子、命兒子、悉入竊竄之中、去離我身 今案、毎庚申勿寝、而呼其名、三戸永去、万福自来」(『口遊』時節門)

◎九転 道教にいう、不老長生の丹薬。九回練って作るためにいう。転じて不老長生の

方術。「九転」之丹、服之三日得仙」(『抱朴子』金丹)「額外望煙九転丹」(『本朝無題詩』卷五「初冬偶吟」藤原季綱)

◎大聖 此の上なく優れた人。至聖に同じ。「至人無為、大聖不作」(『莊子』知北遊)「夫周公且者千年之大聖、金石比堅」(『本朝文粹』卷五「為貞信公請致仕第二表」大江朝綱)

◎玄風 深遠な老荘の道。玄道に同じ。「夫李老之立玄道也、猶顯春台五千文」(『本朝文粹』卷十「暮春於浄閣梨洞房同賦花光水上浮」源順)

◎兼意 兼もとの意思。「遇九臯之介鳥兮、怨兼意之不呈」(『文選』「思玄賦」張衡)「青水溪辺唯兼意」(『晋家文章』卷五「劉阮遇溪辺二女詩」)

◎流年 流れ去る年月。「蓋所以惜流年、以貪急景」(『本朝文粹』卷一「清風戒寒賦」菅原道真)

◎揚詠 酒を飲み詩歌を詠むこと。「一觴一詠、亦足以暢叙幽情」(『芸文類聚』歳事部中「三月三日」蘭亭詩序)王羲之「絃歌復揚詠 樂道知所帰」(『白氏文集』「北窓三友」)

◎鳳閣 鸞台之客 鳳閣は中務省の唐名、鸞台は太政官の唐名で高官の意。鸞鳳に同じ。「其威也、足率鸞鳳之群」(『本朝文粹』卷五「請罷藏人頭狀」菅原道真)

◎刷羽 刷羽を整える。身なりを整える。刷は羽の根のこと。「將隨渤澥去 刷羽汎清源」(『文選』卷三〇「和謝宣城」沈約)

◎影従 影のようにつき従う。景従に同じ。「天官景従 寢威盛容」(翰曰、景影、言如影隨、又景慕也) (『文選』卷一「東都賦」班固)

◎打鉢 刻燭之家 累代の文人たち。「打鉢」は未詳。「刻燭」は蠟燭に刻み目を付けて時を測ること、また時を測ってその時間内に詩を作ること。「竟陵王子良、嘗夜集学士、刻燭為詩」(『南史』王僧孺傳)

◎聲華 美しい評判。「昔為京洛聲華客 今作江湖潦倒翁」(『白氏文集』八八八「晏坐間吟」)「和漢朗詠集」卷下「老人」にも)

◎響 響きが声に應じるように速やかに応ずるさま。「言無可否、應之如響」(李善注、史記「淳于髡曰、鄭忌、其応我若響之応声也」) (『文選』「運命論」)「応響而和、甚於宿構焉」(『本朝文粹』卷八「延喜以後詩序」紀長谷雄)

◎伯禽之居周||伯禽は周公旦の子。伯禽・康叔の二人が周公にまみえたとき、礼に反していたので三度まみえ三度むち打られた。商子は二人に父子・兄弟の礼を教えた。「康叔・伯禽失子弟之道、見於周公拜跪驕悻、三見三答。往見商子、商子令觀桶梓之樹。二子見桶梓、心感覺悟、以知父子兄弟之礼。」(『論衡』謹告)

◎霍禹之在漢也||霍禹は漢の人。武帝に信任された大司馬霍光の子。宣帝の時右將軍。霍光の死後、謀反の罪に問われて誅戮された。霍禹と庚申の關係は不明。ここでは、周公旦や霍光のように優れた人物の子であつても必ずしも立派な人物であるとは限らないとして、それと比べて道長の息、頼通のすばらしさを讃える。「於戲、魯公者周公之嫡嗣也、霍禹者霍光之長男也。漢家襲封之後、懸蒼頭於黃山之雲、齊國報政之中、黃北面於東海之月。積善余慶、獨冠古今者也。」(『本朝文粹』卷八「夏日陪員外端尹文學同賦泉伝万歳声応教詩序」大江以言)も同様の例。

◎蒼蒼||月の光の青白いさま。「又帰何処去 塵路月蒼蒼」(『全唐詩』卷五二八「洛東蘭若夜婦」許渾)「烟月蒼蒼風瑟瑟 更無雜樹對山松」(『白氏文集』一三九四「題清頭陀」)

◎齊執||齊国名産の白絹。緻密で光沢がある。「新裂齊執素 鮮深如霜雪」(『文選』卷二十七「怨歌行」班婕妤)「其婦女則下至侍婢、裝非齊執不服」(『本朝文粹』卷二「意見十二箇条」三善清行)

◎楚練||楚の国のねりぎぬ。
◎皎皎||月の白く輝くさま。「皎皎天月明 弈弈河宿爛」(『文選』卷二三「秋懷詩」謝惠連)

◎鸞鏡||鏡。鸞鳥は伴侶を恋しがり、鏡に映つた自分の姿を見て恋死にしたという。「昔霸齊王||中略||獲一鸞鳥、王甚愛之、欲其鳴而不致也||中略||三年不鳴。其夫人曰、嘗聞鳥見其類而後鳴、何不懸鏡以映之。王從其意、鸞親形悲鳴。哀響中霄、一奮而絶。」(『芸文類聚』鳥部所引「鸞鳥詩序」范泰)「懸鸞鏡於波心 似揚州之鑄出」(『本朝文粹』卷八「八月十五夜侍亭子院同賦月影滿秋池応太上法皇製詩序」菅原淳茂)

◎鶴髮||白髪のこと。「宛転蛾眉能幾時 須臾鶴髮乱如糸」(『全唐詩』「代悲白頭翁」劉希夷)
◎雪時乘月||後に出てくる王子猷の故事。山陰に住んでいた王子猷は夜の間に積もつた雪を見て、友人の戴安道のことを思い出し、剡県に住んでいる彼を訪ねようと小舟に乗って出かけたが、たどり着いたときには興が失せてしまつて戴には逢わずに帰

つてきた。「世説、王子猷居山陰而隱。夜大雪。眠覺開屋酌酒。四望皎然、因起彷徨、詠左思招隱詩。忽憶戴安道。時戴在剡。便乘一小船。徑宿方至。造門不前返。人問其故也、王曰、乘興而返。何必見戴也」(『書陵部本』「蒙求」一七六「王子猷尋戴」)古注「蒙求」に載せる王子猷の故事に月は出てこないが(『晋書』王子猷伝には「月色晴朗」の語がある)、我が国では、『唐物語』の王子猷説話に「雪はじめてはれ、月の光清くすさまじき夜」といい、「もろともに月みんとこそいそぎつれかならず人にあはむものかは」という如く、「雪の夜月を見る」という状況に言及することが多い。↓田中幹子「王子猷尋戴」説話の日本文学における受容と変遷」(『和漢比較文学』7、平成三年六月)

◎容与||舟などのゆつたりと静かに行く様。「舞袖飄飄揮容与 忽疑身是夢中遊」(『白氏文集』二八七八「府中夜賞」)

◎繁絃咽流||琴の絃と流れの結びつきはいわゆる「伯牙絶絃」の故事によるか。「列子、伯牙鼓琴、志在高山、鐘子期曰、善哉峨々若太山。志在流水、期曰、善哉洋洋若江河。及期死、伯牙遂絶絃、不復鼓琴。痛知音之永絶」(『書陵部本』「蒙求」一一八「伯牙絶絃」)

◎阮嗣宗之琴||阮籍「詠懷詩」其一(『文選』卷二三)を踏まえた表現か。「夜中不能寐 起坐彈鳴琴 薄帷鑑明月 清風吹我衿 孤鴻号外野 翔鳥鳴北林 徘徊將何見 憂思獨傷心」

◎坐客||列席の客。「臨觴一搔首 坐客亦徘徊」(『白氏文集』五三八「九日登巴台」)
◎梁鷄||梁の上にいる鷄。鷄が鳴くのは夜明けが来たしるし。「玄中記曰、東南有桃都山。上有大樹、名曰桃都。枝相去三千里、上有天鷄。日初出、照此木、天鷄即鳴、天下鷄皆隨之。」(『芸文類聚』鳥部中「鷄」)「梁鷄樓而暈唱 笛吹向子期之隣」(『新撰明詠集』卷上秋夜「對月遠情多」紀奇名)

◎醉後入郷||酒に酔つて郷郷に入る。郷郷は酒の快い酔い心地に俗世を忘れた状態を譬えた架空の国。「醉之郷、去中国不知其幾千里也。其土曠然無涯、無丘陵阪險。其氣和平一揆、無晦明寒暑。其俗大同、無邑居聚落。其人甚精、無愛憎喜怒(後略)」(『唐書』「隱逸伝」所引「醉郷記」王績)「未知幾曲醉 醉入無何郷」(『白氏文集』二九五八「池上有小舟」)「何必更遊京国去 不知且入醉郷」(『白氏文集』三〇八八「醉別程秀才」)

◎右軍之會||王右軍こと王羲之が晋の永和九年三月三日に、会稽山陰の蘭亭で曲水の宴

を行つた故事。「永和九年歳在癸丑。暮春之初、会于会稽山陰之蘭亭。修禊事也。群賢畢至、少長咸集。一中略一 流觴曲水 列坐其次 雖無糸竹管絃之盛、一觴一詠亦足以暢叙幽情」(『芸文類聚』歳事中 三月三日所引「蘭亭詩序」 王羲之)

◎詞皆遇境 作つた詩文がすべて詩境に合致している。詞は文章全般をさす。境はこゝでは詩境のこと。詩の境地。「醉郷」と「詩境」との対句の例としては「白氏文集」二七二二「將至東都先寄令狐留守」に「詩境忽來還自得 醉郷潛去与誰期」がある。

◎左賢之文 左賢は晋の文人左思。左思が「三都賦」を作つたところ、これが大評判となつて人々が争つて筆写したため、洛陽の紙価が高騰した。ここでは、洛陽の紙価を高からしめた左思の文のように優れた詩文をさす。「晋書、左思、字太冲。少博學 覽文卷。欲作三都賦、乃詣著作郎張載。訪岷邛事。遂構思十稔。門庭戶闔、皆著紙筆、遇得一句、便疏記之。後徵為秘書郎監」(『真福寺本古鈔本』「蒙求」四四六「左思十稔」)

◎腐木之蛩 季夏之月、一中略一 温風始至、蟋蟀居壁、腐乃學習、腐草為蛩」(『礼記』月令)

◎累葉 累代に同じ。代々。「子伝儒家之累葉 開翰苑之詞華」(『本朝文粹』卷三「弁散策策文」 村上天皇)「家門久伝累葉之儒風 父祖共忝三代之侍読」(『本朝文粹』卷六「為大江成基申請助狀」 紀齊名)

◎儒風 儒者の家風。「學士涉衆流於一朝 嗣儒風於三代」(『本朝文粹』卷九「北堂文選竟宴各詠句得遠念賢士風」 菅原文時)

◎愚谷之鶯 鶯は冬の間は谷に籠もり、春になると谷を出て声高くさえずるとされる。「伐木丁丁 鳥鳴嚶嚶 出自幽谷 遷于喬木」(『詩經』小雅「伐木」)「鶯の谷よりいづる声なくは春くることを誰か知らまし」(『古今集』春上一四 大江千里)「詩經」(『伐木』)の鳥が鶯と解されるようになったことについては、渡辺秀夫「谷の鶯・歌と詩と——(典拠)をめぐって」(『平安朝文学と漢文世界』所収)に詳しい。

◎歡華 華やかな喜び。「望後進之歡華 眼疲雲路」(『本朝文粹』卷六「申民部大輔狀」 橘直幹)

◎惠露 君の恩を万物を潤し青む露に譬える。「惠露沾吳 仁風扇越」(『文選』卷五十九「齊故安陸昭王碑文」 沈約)「忽忘惠露 何不忠於公」(『本朝文粹』卷七「為出雲權守藤原朝臣請帰京狀」 高階成忠)

【通釈】

七言、歳暮に藤氏の若君の書斎において庚申を守り、皆で「明月が積雪を照らす」という題で詩を作る。それぞれ一字を分け、若君の命に応じた詩一首(「庭」という韻字を得た。併せて序)

そもそも、長寿の為に三尸虫を体内から去り、九転の丹薬を作ること学ぶのはあの古の偉大な聖人が遺した深遠な道である。また、花を愛でその下で宴を開くのは我々が若君のもとからのご意向である。

そういうわけで、行く年に景物を惜しみ、詩宴をこの良き夜にお命じになる。高位高官の客人は威儀を整えて影のように若君に付き従うし、詩作を宗とする者たちはすばらしい評判(となるような詩)を蓄えて君のお召しに即座に応じる。

あの周公旦の子伯禽が周にいたときも、(これといった功績はなく)わずかに商子を訪れて礼について問うただけである。霍光の子霍禹が漢にいたときも(右將軍ではあったが)いまだ庚申を守って詩を作るなどということは知らなかった。

(道長公の子頼通公が庚申の詩宴をお開きになるように)今が古を凌駕するのは、教えずして成つたものである。

この時、積雪は白い色を凝らし、月がその上に照り輝いて光を添える。青白く輝くさまは、斉の国の白絹に冷たく光る楚の国のねりぎぬを重ねているのかと思うほどだし、皎々と輝くさまは、鏡の前の寒々とした白髪頭と区別が付かない。

雪の夜に月に乗じて遠出したり、月夜に雪にあつてのどかに遊んだりするに至っては、雪明かりの下小舟がのどかに行く様は王子猷が戴安道を尋ねていった舟のようだし、月に照らされて弾く琴の音は咽ぶようで、阮嗣宗が明月の前で弾いた鳴琴の音を思い起こさせる。

すでに列席の客人たちが興に入つて久しく、梁の上の鶉は頻りに夜明けを告げている。

人々はすっかり酔って心地よい気分には浸っている。これに比べれば王羲之が会稽で催した宴など笑いぐさでしかない。今夜の詩は皆詩境に合致しており。左思の作のとき名文をすらすらと作り上げている。

(その中で)私匡衡は腐木に生じる蛩のようにみすばらしい存在ですが、長年累代の儒家の伝統を守ってきました。また私は性愚迷で、谷に潜む冬ごもりの鶯のように

世に認められておりませんが、来春こそ君のお恵みを受けて飲びの日を迎えたいと願っている次第でございます。

五 八月十五夜陪員外藤納言書閣同賦月照・前竹応教（以探之并序）

公孫弘曰

虎豹馬牛者禽獸之不可制者也
及教訓服習之到可牽持駕服
唯人之從

彼毛群猶如之
何況於人倫乎

是故我納言

歎学之不講惜道之欲衰
開玉府以集縑綃

臨瑤池以擬洙泗
遂使

道德仁義之困歌湛露兮子來
礼楽儒雅之林慕清風兮親附

昔鄭玄之親書八千卷
漢史用為美談

張華之載書三十車
晋朝推其好學

彼皆為独善一也
曾無兼濟汎愛之意

是即為澄清天下
既作化民成俗之源

凡厥長育人才
使詩人無素飡之譏

不亦悦乎
方今

公孫弘曰く

虎豹馬牛は禽獸の制すべからざる者なり
これを教訓服習するに及びては牽持駕服すべきに到り、唯、人之從うのみ、と。

彼の毛群にして猶ほ之の如し
何ぞ況むや人倫に於いてをや

是の故に我が納言

学の講ぜられざるを歎き道の衰へむとするを惜しみ
玉府を開きて以て縑綃を集め
瑤池に臨みて以て洙泗に擬ふ

遂に

道德仁義の困をして湛露を歌ひて子來せしめ
礼楽儒雅の林をして清風を慕ひて親附せしむ

昔鄭玄の書を観ること八千卷
漢史用ゐて美談と為す

張華の書を載すこと三十車
晋朝其の好學を推せり

彼は皆独善為ること一なり
曾て兼濟汎愛の意無し

是れは即ち天下を澄み清むるが為なり
既に化民成俗の源と作る

凡そ厥の人才を長育するや
詩人をして素飡の譏り無からしむ

亦悦ばしからずや
まさに今

秋天瑟瑟夕漏沈々
昔年八月十五夜
曲江池畔杏園辺

今年八月十五夜
横街巷南竹牖前

感清景之難逢
賞孤葵之可翫

至夫

映紅紗而蒙籠
抽碧玉而照耀

烟色変以雪鬢暗催
加此君於三友之外

雨声晴而風襟不静
望常娥於蕃妓之中者也

于時
門下独有不遇者

步邯鄲而遺恨
交執綺而多慙

霜台者吾昔所歴也
忝仰廻顧於驄馬之跡

水閣者君今所楽也
自得羽翼於鸞鶴之群

用与不用也
冀莫厭一毛遂云爾

(序ノミデ詩ナシ)

秋天瑟瑟として夕漏沈々たり
昔年八月十五夜
曲江池畔杏園の辺り

今年八月十五夜
横街巷南竹牖の前

清景の逢ひ難きに感じ
孤葵の翫ぶべきを賞つ

それ

紅紗に映りて蒙籠
碧玉を抽きて照耀たるに至りては

烟色変じて以て雪鬢暗に催し
此の君を三友の外に加ふ

雨声晴れて風襟静まらず
常娥を蕃妓の中に望む者なり

時に

門下に独り不遇なる者有り
邯鄲を歩みて恨みを遺し

執綺に交じりて慙多し
霜台は吾の昔歴する所なり

忝なくも廻顧を驄馬の跡に仰ぐ
水閣は君の今楽しむ所なり

自から羽翼を鸞鶴の群に得たり
用ゐらると用ゐられざると

冀くは一の毛遂を厭ふことなかれと云ふこと爾

【校異】

1, 月照一ナシ(陽)(静)(東A)(京)(賀)(祐)(神)(無)(岡)(東北)(鶴)

2, 觸一窓(東A)(東B)(島)(賀)(神)(東北)(多)(鶴) 3, 之一此(底) 他本ニ依ツテ改ム 4, 樂一学(底)(内)(静)(国)(東A)(東B)(島)(京)(多) 一学(樂敷)ト傍書(陽)(賀茂)(山)(神)(東北) 祐徳本及ヒ上記傍書ニ依ツテ改ム 5, 用一以(底) 他本ニ依ツテ改ム 6, 書一筆(内)(静)(国)(東A)(東B)(島)(京)(賀)(神)(岡)(東北)(多)(鶴) 一籍(無) 7, 汎一沈(国)(東A)(東B)(島)(無)(多)(鶴) 一沈(ミセケチ汎ト訂正)(静)(陽) 一泛(京)(賀)(山)(祐)(岡)(東北) 8, 即一則(陽)(賀)(山)(祐)(岡)(鶴)(東北) 9, 紗一沙(内)(国)(島) 10, 遇一過(東A)(神)(岡)(鶴)

【語釈】

◎員外藤納言||藤原道長。道長の權中納言任官は永延二年正月二十九日から正暦二年九月まで。同九月七日から權大納言(正暦六年六月十八日まで)

匡衡霜台(彈正台) 歴任は永観二年から永延二年まで(五年間)。従つて、永延二年から正暦二年の間の八月十五夜か。

◎公孫弘曰||「天子以册書答曰『問、弘称周公之治。弘之材能自視孰与周公賢』弘対曰『愚臣淺薄、安敢比材於周公、雖然愚心曉然見治道之可以然也。夫虎豹馬牛、禽獸之不可制者也。及其教馴服習之、至可牽持駕服。唯人之從。臣聞、揉木者不累日、銷金石者不累月。夫人之於利害好惡、豈比禽獸木石哉。』」(『漢書』卷五十八「公孫弘ト式兒寛伝第二十八」) 公孫弘は漢の人。貧しい家の生まれだが、年六十の時、召しだされて博士となり後丞相にまで昇つた。『蒙求』「漢相東閣」の故事で知られる。「漢書。公孫弘為丞相、開東閣、以招賢人。後封平津侯。丞相封侯、自弘而始也」(『真福寺本古鈔本』『蒙求』四九〇「漢相東閣」) 匡衡が詩文の中で公孫弘にしばしば言及することについては、後藤昭雄「大江匡衡の詩文」(『平安朝漢文学論考』桜楓社一九八一年) 参照。

- ◎教訓||教えること。「教訓正俗 非礼不備」(『礼記』曲礼上)
- ◎服習||従いされる。
- ◎牽持||引つ張つて持つ。
- ◎駕服||車に付くことに従順に従う。
- ◎毛群||獸の群。「毛群内闈 飛羽上覆」(『文選』卷一「西都賦」班固)
- ◎人倫||人間。「雖誠禽獸、猶思郷土 況於人倫」(『本朝文粹』卷十三「為齋然上人入唐時為母修善願文」慶滋保胤)

◎玉府||官府の美称。

◎縑緗||書物。縑緗は淺黄色の薄絹で書物の表紙に用いる。「深究縑緗之幽、終期青雲之上」(『本朝文粹』卷一一「詰眼文」三善清行)

◎瑤池||崑崙山にある、西王母が周の穆王に会つたという池。転じて美しい池。「瑤池長不夜 珠樹正開花」(『全唐詩』卷三五七「同樂天和微之深春好」劉禹錫)「周遊鼎似行瑤池之曲」(『本朝文粹』卷八「八月十五夜同賦映池秋月明」三善清行)

◎洙泗||泗水とその支流の洙水。孔子の誕生と終焉の地。「負笈叩鐘者 還迷洙泗之縑地」(『本朝文粹』卷九「北堂文選竟宴各詠句得遠念賢士風」菅原文時) ↓文選

◎道德仁義之圃||圃は庭園。道德・仁義が行われる場。「道德仁義 非礼不成」(『礼記』曲礼上)

◎湛露||『詩経』小雅「南有嘉魚之什」の篇名。天子が諸侯と宴をするさまを詠う。

◎子来||子のごとく来る。子が親を慕い来るように、人々が立派な君のもとに集まつて来ること。「経始勿亟 庶民子来」(『詩経』大雅「臺台」)「望扶木而鳥集 涉滄溟而子来」(『本朝文粹』卷九「夏夜於鴻臚館餞北客」大江朝綱)

◎礼楽||礼節と音楽。礼によって社会に秩序をもたらし、楽によって人々の心を和らげる。「導之以礼楽、而民和睦」(『孝経』三才章)

◎儒雅||正しい儒学、立派な儒者。「儒雅則公孫弘、董仲舒」(『漢書』公孫弘伝贊)

◎礼楽儒雅林||礼楽を学ぶ立派な学者たちの集まり。大学寮出身者の意か。

◎清風||清らかな風。清らかな風格。「吉甫作誦 穆如清風」(『詩経』大雅「烝民」)

◎親附||親しみ附く。心服する。「万物無不備具 而百姓無不親附」(『戦国策』斉巻・宣王)

◎鄭玄之観書八千卷||鄭玄は後漢、北海の高密の人。字は康成。七四歳で卒するまでに門弟子数百人。『毛詩箋』『礼記』の注など多数の注釈を著した。かつて党事が起こつて禁固せられた時、門を閉ざして経学を修めるなど、生涯、学に励んだ。ただし、その生涯に八千巻の書を見たことは「後漢書』『鄭玄伝』には見えない。

◎張華之載書三十車||張華は晋、方城の人。字は茂先。博学で知られる。書物を愛好し、引つ越しの時に書物を積んだ車が三十台にもなった。「雅愛書籍 嘗徙居、載書三十乘。天下奇秘世所稀有者、悉在華処。博物洽聞 世無与比」(『晋書』張華伝) なお、『蒙求』「張華台坼」の新注本には上の『晋書』の記事を引くが、真福寺本旧鈔本『蒙求』にはこの部分は引かない。

◎独善二『孟子』「尽心」による語。不遇の時は己の身を正しく修めて時が来るのを待つ。「窮則独善其身 達則兼善天下」(『孟子』「尽心上」)「古人云 窮則独善其身 達則兼善天下」(『白氏文集』一四八六「与元九書」)

◎兼濟二天下の人々を救う。兼善に同じ。「丈夫貴兼濟 豈独善一身」(『白氏文集』五五「新製布裘詩」)「余少携書籍 略見兼濟独善之義」(『本朝文粹』卷一一「池亭記」兼明親王)「弟子自竹馬鳩車 至立強仕 不好独善企兼濟」(『本朝文粹』卷一三「為左大臣供養淨妙寺願文」大江匡衡)「大曾根章介「兼濟と独善」(『仏教文學研究』第八集)

◎汎愛二多くの人を公平に愛する。「汎愛衆而親仁」(『論語』学而)「所謂汎愛而親仁 行有余力則以學文」(『本朝文粹』卷九「夏日陪右親衛將軍初說論語各分一字」源順)

◎澄清二世を治め清めること。「攬轡慨然有澄清天下之志」(『後漢書』党錮列伝第五七「范滂伝」)「奉折金輪聖主 增長福壽 円満御願 澄清天下 興隆佛法」(『本朝文粹』卷一三「於尾張國熱田神社供養大般若經願文」大江匡衡)

◎化民成俗二民を教化して善い風俗を作り出すこと。「君子如欲化民成俗 其必由學乎」(『礼記』學記)

◎人才二才能ある人。「然則人才適名 城戍易守」(『本朝文粹』卷二「意見十二箇条」三善清行)

◎長育二育てる。

◎素飡二職を務めずに徒に禄を受けること。才能がないのに高位に付くこと。素餐に同じ。「所謂尸位素飡者也 素者空也 空虚無德 飡人之禄 故曰素飡」(『論衡』量知)「彼君子兮 不素餐兮」(『詩経』魏風 伐檀)「黄壤之期不遠 素飡之責更來」(『本朝文粹』卷五「請被停職中務省卿狀」兼明親王)

◎瑟々二寂しげな色。多くは水や植物の碧色をいう。「未秋已瑟瑟 欲洗雨先沈沈」(『白氏文集』二二八二「太湖石」)「幾臨瑟瑟寒声水 又蕭々暮景山」(『菅家文章』卷二「山家晚秋」)

◎夕漏二夕方の時間「夕漏欲移」(『本朝文粹』卷一「織月賦」源英明)

◎沈沈二夜の更けるさま。時が静かに過ぎるさま。「銀台金闕夕沈々」(『白氏文集』七二四「八月十五夜禁中独直对月憶元九」)

◎昔年八月十五夜二以下四句、「白氏文集」一〇六九「八月十五夜、溢亭望月」の首聯

及び頸聯「昔年八月十五夜 曲江池畔杏園辺 今年八月十五夜 湓浦沙頭水館前」による。

◎曲江二長安の東南にあつた池。名勝地。

◎杏園二長安の東南、曲江の西にあつた園。唐代、進士に及第した者にここで宴を賜つた。

◎横街二横町。「紫宮之東 横街之北」(『本朝文粹』卷一〇「暮春同賦落花乱舞衣各分一字 忠太上皇製」大江朝綱)

◎巷南二街の南。

◎清景二清らかな月の光。この句、「白氏文集」三一八二「八月十五日夜同諸客翫月」の五句目「清景難逢宜愛惜」による。

◎孤檠二ひとむらの竹。ただし、王朝漢詩で「孤檠」というときは、多く菊をさす。「侵雪侵霜 無移者竹叢之色」(『本朝文粹』卷三「对松竹」藤原広業)

◎紅紗二紅色のうすぎぬ。こゝは窓の帷をいう。「瓊枝日出曬紅紗」(『白氏文集』一〇五一「山枇杷」)「見有綺紗大牀 茵蔦甚麗 而婢持錦香囊」(『世説』沙修篇(劉孝標注))

◎碧玉二青い玉。竹の比喩。「藍羅剪葉 碧玉抽竿」(『本朝文粹』卷一一「冬夜守庚申 同賦修竹冬青应教」藤原篤茂)「皮開拆揭錦 節露抽青玉」(『白氏文集』三六五「題小橋前新竹招客」)

◎烟色二烟は、もや。竹やぶにたちこめるもやの色。「澗戸鳥帰 遮眼竹煙松霧之色」(『本朝文粹』卷十一「暮春遊覽同賦逐処花皆好」紀齊名)『和漢朗詠集』卷下山家にも載せる)

◎雪鬢二雪のごとく白い鬢。白髪頭。「雪鬢年顔老 霜庭景氣秋」(『白氏文集』一三二七「秋寒」)「雪鬢論邁 黄壤期催」(『本朝文粹』卷一三「供養自筆法華經願文」兼明親王)

◎此君二竹の異名。晋の王徽之(子猷)が竹を非常に愛し、自宅に植えて「なんぞ一日も此の君無かるべけんや」と言った故事による。「王子猷嘗暫寄人空宅住、便令種竹、或問、暫住何煩爾。王嘯詠良久、直指竹曰、何可一日無此君」(『世説』任誕)

「晋騎兵參軍王子猷 種而称此君 唐太子賓客白楽天 愛而為我友」(『本朝文粹』卷十一「冬夜守庚申同賦修竹冬青应教」藤原篤茂)『和漢朗詠集』卷下竹にも載せる

◎三友三友・詩・酒の三つをさす。『白氏文集』二九八五「北窓三友」による語。「三友者為誰」琴罷輒舉酒 酒罷輒吟詩 三友遞相引 循環無已時」

◎雨声雨声雨の音。ここでは竹の葉が風に吹かれて起る雨音のような響き。「寒林蕭索 落葉紛飛 試聞則雨声不休」(『本朝文粹』卷十一「冬日於極樂寺禪房同賦落葉声如雨」慶滋保胤)は落ち葉の音を雨声に響える例。↓三木雅博「聴雨考」表現素材の獲得と定着をめぐる(『中古文学』三二一号 昭和五八年五月)

◎風襟風襟風に吹かれている襟。「露杖節竹冷 風襟越蕪輕」(『白氏文集』二四七「秋遊原上」)

◎常娥常娥月にいるという仙女の名。また月の異名。姮娥に同じ。「又(淮南子)曰 羿請不死之藥於西王母。姮娥竊之奔月宮。姮娥羿之妻也。服藥得仙。奔入月中為月精」(『芸文類聚』天部上「月」)「寵常娥於華葉 蔭顧免於枝条」(『本朝文粹』卷八「八月十五夜陪普師匠望月亭同賦桂生三五夕」紀長谷雄)

◎蕃妓蕃妓たくさん集められた妓女たち。「白樂天三友之居 閑夢難結 謝安石蓄妓之処 幽思更催」(『本朝文粹』卷十一「初冬同賦紅葉高窓雨」橘正通)

◎門下門下邸の内。ここでは員外藤納言の書閣での詩会に集う人々をいう。

◎步邯鄲步邯鄲寿陵の若者が邯鄲の都での歩き方を学ぼうとして、結局自分本来の歩き方で忘れてしまい、這って帰った故事。人まねをしたために自分の本分を失ってしまったことへの譬え。「且子独不聞夫寿陵余子之学行於邯鄲与。未得国能、又失其故行矣、直匍匐而帰耳」(『莊子』秋水)

◎紈綺紈綺しろぎぬと綾ぎぬ。貴人の服装。また貴人。「珥蟬憂而襲紈綺之士 此焉遊処」(『文選』卷「秋興賦序」潘岳)「服紈綺而遊蓬萊之宮」(『本朝文粹』卷五「為貞信公請致仕表」大江朝綱)

◎霜台霜台彈正台の唐名。匡衡は永観二年から永延二年まで彈正小弼をつとめた。(『中古歌仙三十六人伝』)

◎迴顧迴顧振り返ること。引き立て。「心慙賢相之迴顧」(『江吏部集』卷上「七言夏日於左相府書閣同賦水樹多佳趣」應教)(『本朝文粹』卷八にも出)

◎驄馬驄馬後漢の桓典のこと。厳正な御史であった桓典は常に驄馬(あしげの馬)に乗っていたので驄馬御史といわれた。御史台も彈正台の唐名。「後漢 桓典字公雅 為御史 常乘驄馬 時人曰 行々且止 避驄馬御史」(『真福寺本蒙求古鈔本』「桓典避馬」)

◎羽翼羽翼補佐すること。「羽翼已成、難動矣」(『史記』留侯世家)「昔侍鳳閣已為羽翼之臣」(『本朝文粹』卷七「為出雲權守藤原朝臣請歸京狀」高階成忠)

◎鸞鶴鸞鶴鸞や鶴のごとき仙鳥。ここでは貴人をいう。「鸞鶴羽翼之類 自西自東」(『本朝文粹』卷五「為富小路右大臣辭職第一表」菅原文時)

◎毛遂毛遂趙の人。趙の公子平原君の食客であった。平原君が楚との従約のため楚王のもとに赴く際に、文武両道を兼ね備えた者二十人を同行しようとして二十人目の人材が見つからなかった。毛遂は自薦して同行を願い、見事に楚王に従約を定めしめた。

「趙使平原君求救、合從於楚。約与食客門下有勇力、文武具備者二十人偕。一中略」士不外索、取於食客門下足矣。得十九人、余無可取者、無以滿二十人。門下有毛遂者、前自贊於平原君曰、遂聞、君將合從於楚、約与食客門下二十人偕、不外索、今少一人。願君即以遂備員而行矣。 (『史記』「平原君列伝」)

【通釈】

八月十五夜に藤原權中納言の書閣において、同じく「月が窓の前の竹を照らす」という題に賦し、權中納言の命に応えた(採を韻字とする。并に序)

かの公孫弘がいうには「虎や豹、馬や牛は制御できない鳥獣である。しかし、教えて服従するようにすれば、やっとこれを引き連れたり車に付けて引かせたりできるようになり、ひたすら人間に従うようになる」と。あの獣の類でさえそうなのだ。ましてや人間に教化の及ばぬことがあるうか。

こういうわけで我らが中納言殿は学が講じられなくなったのをお嘆きになり、道徳が衰えようとしているのをお惜しみになって、ご自宅を解放してさまざまな書物をお集めになり、邸内の美しい池を孔子ゆかりの地である洙泗に擬しておられる。こうしてとうとう道徳仁義を重んじる人々が(中納言殿の下に)父の下に集まる子のごとく喜び集い、礼樂を学ぶ立派な儒者たちが中納言殿の清らかな人柄を慕って親しみ従うまでになった。

昔、鄭玄が八千巻の書物を読んだことを漢は歴史上の美談とし、張華が引つ越しの際三十車分の書物を運んだことを晋では好学の行いとして推挙した。しかしながら、彼らは皆、ひたすら自分の身さえ修めればよいという独善の者であり、広く人々を愛し、社会全体を救おうという気持ちはなかった。それに対してこちらの中納言殿は天

下を治め清らかにするためになさっているものであり、すでに人々を教化して社会を良くするおおもとなつていらつしやる。その人材をお育てになるにあつては、詩人が無駄な禄を食んでいるという非難がないようにしてくださる。喜ばしいことではないか。

まさに今、秋の天はもの寂しい色をたたえ、夜はしんと更けていく。昔、唐の白居易は八月十五夜に曲江池のほとり、杏園の辺りで月を愛でたが、今年、中納言殿は八月十五夜に洛中の邸の竹の窓の前で詩宴を開かれた。なかなか逢い難い十五夜の清らかな景色に感じ入り、一むらの竹の趣深さを愛でるためである。

月の光が窓辺の赤い帷におぼろに映え、青い竹の葉にきらきらと輝くに至っては、群竹は月の光におぼろにかすみ、見ている我々の鬢にもいつの間にか白いものが混じつたかに見える。琴・詩・酒の三友の他に此の君（竹）をも今宵の詩宴の仲間に加えよう。風にざわめく竹の葉は晴れた夜に雨のような音を立て、我々の襟元を風が吹き抜ける。窓から望む常娥（月）は多くの妓女たちと比べても群を抜く美しさだ。

この時、列席者の中に一人不遇な者がおります。あの邯鄲の歩き方を学ぼうとした寿陵の若者のように、分不相応なまねをして自分の本質を見失ってしまい、美しい衣装に身を包んだ高貴の方々中に立ち交じつて恥ずかしく思っているのです。

霜台（彈正台）は嘗て私が勤めていたところです。もったいなくも、駿馬御史と呼ばれた桓典のように信頼されお引き立てにあずかりました。水閣は今君が詩宴を開いて楽しんでいらつしやるとうれしいです。君は求めずともここに集う立派な方々の中から腹心の部下を得ていらつしやいます。（他の列席者と私との違いは）君に重用されているかいないかなのです。どうかあの毛遂のごとく自ら名乗りを上げて君にお仕えしようとする私めをお厭いくださいませんようお願いします。

六 樹滋月過遲（以光之）

（題ノミデ本文無シ）

【校異】

1. 遅―庭（底本以下の諸本）。（島）（国）（内）及ビ『類題古詩』ニ依ツテ改ム

◎『類題古詩』六十六遲部に大江以言、文屋如正による同題（樹滋月過遲）の詩句があり、韻字も同じ光なので、同じ詩会での作と思われる。

樹滋月過遲（以言）

隨柳堤遙留曉雪 吳松江遠繁秋霜 粉娃徐步青闌內 素鶴便翔翠嶺傍

樹滋月過遲（文 如正）

空礙風枝難轉影 深籠煙葉未舒光 度林伴得平頭雪 隔嶺相同滿鬢霜

— 鹿兒島県立短期大学助教教授 —